

自ら体験し、生きる力を育てる学習指導

－音楽の時間は楽しい！－

桜井市立桜井南小学校 教諭 洞 出 勢津子

Horade Setuko

要 旨

子どもたちが、音楽の様々な活動に積極的に参加し、なかまとともに表現活動を楽しむことで一人一人が心を開いて、より豊かな表現活動ができる「音楽の時間」となる教材や指導法を研究する。

キーワード： 楽しい、大好き、やってみたい

1 はじめに

子どもたちは音楽が好きである。けれども、音楽室の音楽は「不思議なかたち」をしている。時として、「音楽は好きだけど、学校の音楽はきらい。」と言われたりする。そんな教科としての音楽を、いかに自然にいやにならない音楽の授業として成立させられるか。知らず知らずに基礎が身に付く、楽しいイメージが描ける、「キラキラした音楽」であることができるか。そんな授業実践の在り方を考えたい。

2 研究目的

子どもたちが、本来「好きである音楽」をさらに意欲的な音楽活動へと興味・関心を深め、音楽を生涯にわたって愛好していく心情を養うための学習指導の在り方について研究する。

3 研究方法

- (1) 意欲的に活動することを目指した学習教材の発掘
- (2) 個を生かし、共に高め合う学習指導の在り方についての考察

4 研究内容

【音楽の授業に関する考え方と実践】

♪ 子どもたちと音楽 ♪ ～音楽を楽しむ心(気持ち)をみんなで～

・・・音楽をするという、本来遊びを深くとりこむことによってしか成立しない教科において、もしも遊びが欠如するならば、それは音楽をすることの意味と内容を無に等しくする作業といわねばならず、音楽学習をすすめればすすめるだけ、音楽は意味のわからない勉強に

なりさがり、音楽は好きだが授業は大嫌いという現実がもたらされるのは当然の帰結といえよう。

このような状況において、さらに指導者から一方的に結果的な要求、例えば「もっと生き生きと・・・」「もっと楽しく・・・」「もっと歌ごころをつけて・・・」「もっと美しく・・・」「もっとよく聴いて・・・」というような抽象的な言葉が児童に投げかけられるのは、ナンセンスの極致とでもいうべきだろう。このような言葉が指導者の口をついて出るようならば、もはや指導でもなんでもないのであって・・・(中略) 子どもたちの生涯にわたるべき音楽生活の出発はみじめに打ちくだかれてしまうことだろう。

音楽教育論集「自分のためにうたがあるとき」柳生 力
“音楽学習があそびでなくなる時” [音楽之友社]

遊び心がどこかに感じられる「音楽の授業」・・・簡単なルールがあって、誰もが参加でき音楽室を出て・・・思わず口ずさんでしまう、そんな歌、そんな音楽。

ソとファを使ってこんなふうにと歌うと・・・

♪みーつけた(ソ-ファファソ)

♪まーけた ひと は すわいしょう(ソ-ファファ ソファファ ソソソソソ)

♪なんページ(ファソファソ)・・・等々。

わらべうた(?)のフレーズで、何気なく歌うと、子どもたちは歌い出しました。

とても自然に。・・・私が楽しくなりました。

なべなべそこぬけ・おちゃらか・お寺の花子さん、などと組み合わせて歌います。

「みんなと一緒に歌えるよ。一人では歌えなくても。」

「歌ってるうちに、一人でも歌ってみたいくなる。」

不思議なことに、子ども達を無理なくわくわくさせてしまう歌。

聴いたときに「いい歌やなあ。」と思わず言わせて、歌っているうちにガンガン歌いたくなる。

題名を聞いただけで「わあ〜！」と気持ちが高ぶってくる、そんな歌。

1993年3月まで、静岡県で小学校の教員を11年間していました。

幼いころから、ピアノを習っていたせいか、音楽は好きで、クラスでも歌をいっぱい歌ってきました。おもしろいですよ。自分が気に入った曲を紹介すると、子どもたちも元気よく歌うんです。その反対に、「やらねばならぬ！」という気持ちが少しでもあると、暗〜い雰囲気になってしまうのです(他の授業も同じですよ)。だから、とにかく、自分が好きな曲をひたすら、さがしては歌っていました。

ところが、それだけではあきたらず、とうとう、自分で歌を創りはじめてしまったのです。それを聞いてくれた、ある先生が「けっこういいじゃ」なんて言うものですから、ますます調子に乗って、創りだしたのです・・・(中略)

先生が笑えば、子どもたちも笑います。先生が歌えば、クラスも歌います。子どもたちと一緒に伸びていく、そんな先生に、・・・(後略)。

「子どもの心にひびく教室の歌」中山 譲 [小学館]

中山さん（ゆずりん）の曲は子どもたちの心にひびく。

♪「そして ぼくらは地球」を歌った時に「先生、いい歌やあ〜。」と言った男の子は歌っている間にあくびをして・・・涙をかくしていました。わたしまで泣きそうになったのを思い出します。

♪「スタートライン」は歌うだけでなく、踊りたくなる歌でした。体育館でゆずりんを迎えたときに、たくさん子どもたちが踊って歌いました。

♪「ドンマイ〜don't mind〜」は3番が大好き！大きな声で歌っています。参観日にはりきってしまう気持ちがピッタリくるのでしょうか。だれかが振り付けて、だんだんひろまって、クラスみんなで天井を指さして「あしたはまたくる〜♪」となります。

「自分のためにうたがある」・・・

誰からも誘いかげられない、動機づけをされない、他から要請もされない、やらなければならないという目的から解放された自由な空間において 子どもたちは、歌うたうただそのことのために、そして自分のために、歌うことができているであろうか。歌うことによって自分を解放し、充実を味わい、その中で音楽することの喜びをますます高めていっているであろうか。

これは、声がうまく出せないとか、歌うことが下手だとかいうはっきりとした理由なり根拠があつてのこととは別の問題のようである。合唱クラブや合唱団に入り、歌がうまくうたえ、そして歌が好きで歌っていることと、とらわれないときに、とらわれない自分が歌をもつということとはは、どうも同じにならない場合もあるように思われてならない。

音楽教育論集「自分のためにうたがあるとき」柳生 力

“自分のためにうたがあるとき”[音楽之友社]

(1) 意欲的に活動することを目指した学習教材の発掘

ア 導入の手遊び（わらべうた、昔ながらの手遊び等を取り入れる。）

授業の導入はとても大切な時間である。全員でオルガンのメロディーに合わせて足ふみや手拍子をするところから始め、二人組・三人組〜クラス全員などの形態で「わらべうた」、「手遊び」を、第1学年を除く全学年に取り入れた。どの学年も、相手と手を触れたり言葉を交わしたりすることで、心がほぐれてくる様子で、そのあと歌を自然に歌い出せる雰囲気が出る。これは、音楽の時間のみならず、全校集会でも同じ手遊びを共有できる利点も生みだした。子どもたちの手遊びは親・祖父母などから、またはテレビから情報を得て進化し、音楽の時間の初めには、なくてはならないものとなりつつある。

イ 鑑賞・表現の両面から学ぶ教材の発掘

歌詞・旋律が子どもたちの心情にマッチするような曲、「鑑賞する」→「表現する」、「表現する」→「鑑賞する」がくり返し出来る曲という視点で、「チョコタン」（蓬萊泰三・作詞）を選んだ。これは、以前からも3年生で鑑賞してきた曲で、そのたびに必ず「歌ってみたい」という声

があがっていた。今回「歌ってみよう」と4年生で取り組んだ。そのことが他学年にも自然に伝わり、授業で取り扱っていないのに歌える子どもまで出てきた。「チョコタン」は内容が子どもたちの共感を呼びやすく、展開が劇的で笑いの中に訴えがある内容である。「聴く」→「歌う」、「歌う」→「聴く」を繰り返しても、子どもたちは何度も歌いたがることに驚いた。教材の力を感じた取組だった。

【子どもたちの感想の例（4年生）】

音楽の時間では、「チョコタン」という歌をしています。「チョコタン」は、さいしょは楽しくておもしろい歌です。でもさいごは、かなしいです。でも、その歌を作った人の気持ちがよくわかりました。そのチョコタンを、ある男の子が好きになって、男の子はさいごにとってもかなしいそうです。さいしょにCDできいたときは、みんなとっても笑っていましたが、でも、何度かしっかりきいてみると、とってもかなしい歌だと思うし、なんで笑ってたのかなあとと思います。…(中略)…とってもこころをこめてうたわないといけないなあと思いました。

音楽では、「チョコタン」という歌を歌っています。この歌は大阪で本当にあったお話です。チョコタンはかなしい話だけど気持ちがとってもわかります。その人の思っていたことがそのまま歌になっています。私ははじめてきいたとき、つらいおはなしだなあと思いました。チョコタンはダンプにひかれて死んでしまったけれど写真の中でわらっていました。好きな人をなぐさめていたんだと思います。チョコタンの歌を考えたのは、車にのっている人にこんな子どももいるんだよ、安全運転してくださいという思いがこもった歌だと思います。チョコタンは、男の子を天国で見守っていると思います。…(中略)…ぜったいふざけてはいけないと思います。心をこめてチョコタンの歌を歌います。チョコタンは天国にいったので歌えません。だからチョコタンのかわりに心をこめて歌います。

今日、南っこ祭りがありました。4年生は「チョコタン」を歌うので前から練習していました。前の日に「持ち物」で「チョコタンを伝える気持ち」というのがありました。「チョコタンを伝える気持ちってどんな？」と聞かれました。私は「チョコタンの気持ちになつてうたうのところがうか？」と言いました。いよいよ歌うときになって、先生が「4年生はぜったいにできる。」といってくれました。私はぶたいの上だけど、きんちょうしませんでした。チョコタンを伝える気持ちをもってきたので、しっぱいせず成功でした。みんな大きなはく手をくれたので、とってもうれしかったです。

(2) 個を生かし、共に高め合う学習指導の在り方についての考察

全員の歌声は一人一人の歌声から。一人一人が認められて表現がひらかれていく。導入の手遊びの大切さは「人と触れ合うこと」である。身体の一部が触れ合うことで心がほぐされていく。心をほぐして音楽活動に参加させることを大切に、次に一人で表現する機会として「チャレンジコーナー」を設け、そこでどのように個々を認めていくか。そのために、学級の雰囲気を作っていく。個々の成長をよく見極めて声をかけていく。出来る限り、教員がほかの子どもと比べるのではなく、前回できなかったことが少しでもできたことを、きちんと認めていくことで「やってみよう」という気持ちがわいてくる。子どもたちは自分の中でほかの子どもと比べることをよく知っている。「いいなあ、すてきななあ」と思うことをまねていく前向きな姿勢にどんどん声かけをして、集団でしか高め合うことの出来ない「認め合い」を絶えず感じる音楽活動になるようにしていく。

5 研究結果と考察

落語、漫才でも「間」が大切で、その「間」の取り方・使い方で内容が良くも悪くもなると聞く。学習にも「間」＝テンポが必要ある。教材の選択も重要だが、実はこのテンポが子どもたちの学習を楽しくする「鍵」である。授業導入は学習のテンポを決める大切な時間である。今回、低学年～高学年が「手遊び」を同じように楽しめたのは、普段の遊びの中で、人と手をつないだり身体に触れたりすることが少なくなっていることが一つの原因かもしれない。手遊びは、声を出しながらドキドキしたり、そわそわしたりとコミュニケーションをする機会になり、心と身体の扉が開かれていく「身体ほぐし、心ほぐし」になっていく「大切な時間」となった。そして、全校集会では同じ手遊びで大勢が楽しめるという大きな成果があった。

この取組では、「音楽」だからこそできる「メロディー合図」を決めて、テンポのある学習形態を音楽の時間だけでなく、学級活動の中で担任とともにつくっていくことが肝要で、特に低学年から一人一人を認めることを大切にし、学年が上がっても「表現が楽しい！表現したい！」と思えるような指導を大切にしていかなければならない。そして、教員自身が「子どもたちと楽しみたい、一緒にやってみたい」と毎時間元気でなければならない。

6 おわりに

柳生力さんは、「音楽教育論集」の中で“教師の寿命”というタイトルで次のように書いている。

1993年生まれのカナダの作曲家、M・シェイファーは、『教室の犀』(THE RHINOCEROS IN THE CLASSROOM) という著書の中で、「私の意見では、どんな先生もまず自分自身の教育に従事しているので、その活動がおもしろければ、それは周囲にも影響するだろう。私の意見では、先生が成熟しないような教育計画はすべてまちがっている。私の意見では、先生はまず生徒であり、そうでなくなるとき、その教育哲学は危機にある。」という。これらの言葉は、音楽における学習行動をうながすもっとも根底的なものが何であるかを、音を扱う作曲家の立場から見事にとらえたものといえる。

「楽しい」、「大好き」、「やってみたい」は、我々大人でも同じである。まず、「楽しい授業」、次に、「授業が大好き」、そして、ますます「やってみたい」となってくる音楽の授業が理想である。技術ばかりを教えても、遊びのようなことばかり教えても、子どもたちは「楽しい」とは簡単に思わない。どちらもバランスよく味わうことで、「仲間とする音楽って楽しい」、「一人で追求する音楽って楽しい」と感じて真剣に「音楽」に近づいていく。子どもたちの表現を妨げず、規定せず、教員自ら音楽の楽しさを伝える授業を日々心がけて、子どもたちと共に「楽しい」、「大好き」、「やってみたい」を実践したい。「実践の新しいヒントは、自分自身の中にある。」と考えたい。

参考・引用文献

- (1) 柳生 力 音楽教育論集「自分のためにうたがあるとき」 音楽之友社 昭61
- (2) 中山 譲 (柚 梨太郎) 子どもの心にひびく教室の歌 小学館